

新型コロナウイルス感染拡大第2波・第3波に備えよう  
—万全の体制を整えて第2波・第3波襲来を迎え撃とう—

開倫塾

塾長 林明夫

Q：ようやく5月25日に緊急事態宣言が解除され、6月1日から全国の学校が再開されましたね。

A：(1)中国武漢から発生した新型コロナウイルス感染症が、中国政府が春節の大移動を制限しなかったために日本を含め中国以外の国々にも一気に拡大。日本をはじめ多くの国々で人の移動が制限され、1929年の世界大恐慌以上の大きな影響を与えています。

(2)そのような世界規模での感染拡大の中、日本政府や道都府県、医療関係者の懸命の努力の下、全国民がこの状況をよく理解し、協力、自律的に行動した結果、5月25日には緊急事態宣言が解除され、6月1日から全国の学校が再開するに至りました。

(3)但し、油断は大敵です。世界での感染拡大はまだまだ収束せず、日本でも第2波、第3波の到来が予想されています。

Q：第2波・第3波の感染拡大に備えるには、どうしたらよいと考えますか。

A：(1)よくよく考えれば、1995年の阪神淡路大震災や2011年の東日本大震災はじめ、ほぼ数年に1回ずつの超大型台風による大規模冠水など、低頻度大規模自然災害は、日本各地、世界各地で1～2年に1回ずつ位は発生しています。首都圏直下型大地震や太平洋大地震、富士山はじめ活火山の噴火爆発なども、これから数年後に発生する可能性は高いと言われています。



(2)今回の中国武漢発の新型コロナウイルス感染症の全世界的規模での拡大も、「低頻度大規模自然災害」の1類型と考えてよいと思います。

(3)そうであるならば、様々な形態で地域や日本、全世界を襲う大規模超大型自然災害は、数年に1回は我々を襲うものと考え、十分に議論を尽くした上でありとあらゆる準備を整えておく必要があります。



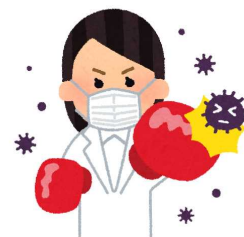
Q：どのような準備をし、第2波・第3波を迎え撃ったらよいと考えますか。

A：(1)一番大切なのは、原因となる感染症を絶対に発生させないしくみづくりです。生命科学者の国家戦略的な育成は欠かせません。感染症の研究をすることの必要性は認めますが、最大の努力をして感染症を外部に持ち出さないことも大切です。

(2)次は、不幸にして感染症が外部に漏れた場合には、情報を即時に公開して、当該施設の地域や国家内での感染拡大防止に努めること。外国への感染拡大をどんなことをしても阻止す

ることです。

- (3) 警鐘を鳴らした医師や専門家のことばに耳を傾け、何としてでも周辺地域への感染拡大を阻止すること、当然です。にもかかわらず、言論弾圧を行い口を封じるなど言語道断、決して行ってはならないことです。国民に説明責任を十分に果たした上で、その地域に限って人々の移動などを全面中止すれば、この新型コロナウイルスは防止できたと考えるのは、私だけではないと思います。
- (4) 更に言えば、ここまで世界中に広まってしまったのであれば、発生源国の人類社会への国家的責任として、ワクチンの研究成果を世界中に開示して、世界の人々とともに、この人類的危機克服のために協力し合うことです。感染被害を被った国々も、感染発生の責任問題は後々議論することにして、とりあえずは、世界中が力を合わせてワクチンの共同開発にベクトル合わせをすべきと考えます。
- (5) アフリカ 54 か国をはじめ開発途上国の感染拡大阻止に向け、「国際協調」の精神で、マスクや医療器具、医療看護師、医療関係者の派遣や研修・育成、感染拡大阻止の具体策の普及に努めるべきです。
- (6) 今後 10 年間の SDGs の最大のテーマを感染拡大の阻止一本に絞り込むべきです。世界は、日本の 100 倍、否、1000 倍、1 万倍位の危機的状況にあります。



**Q：なぜそのように思うのですか。**

- A：(1) 日本以外の国々のことが気になったので、3月2日(月)の学校休校以来、毎日30分以上日本の新聞を読んだあと、英字新聞の Japan Times と一緒に配布される「New York Times」と、イギリスの経済週刊誌「The Economist」を、少しずつですが読んでいるからです。
- (2) 世界を代表するこの2つの情報媒体の大半の記事は、感染拡大の状況分析のものです。
- (3) アメリカやイギリスはもとより、開発途上国から先進諸国まで、ベトナムと台湾、日本を除けば、国家としての存立が困難なほどに危機的状況にあることがよくわかります。

**Q：学習塾、予備校、私立学校は、どのように第2波・第3波、さらには、「低頻度大規模自然災害」に備えたらよいと考えますか。**

- A：(1) 心積り(こころづもり)としては、数年に1回は1～2か月、場合によっては2～3か月、授業が全くできない状況が生じると考え、「低頻度大規模自然災害」のジャンル別に、すべてを準備すべきと考えます。自社内・自校内や、同業他社、地域の商工会議所、経済同友会など、経済団体の人々とともに勉強会を発足、対応策を研究、できるところから準備すべきと考えます。
- (2) ズームやオンデマンド、メール、映像などを組み合わせた「オンライン教育」は、必須です。「オンライン教育」のリテラシーを、すべての先生・社員だけでなく、全塾生、全保護者、全ビジネスパートナーに身に付けて頂くためのトレーニング、研修制度の整備は急務です。



(3) 危機的状況下で最も困難を極めるのが、塾生募集(募集活動)と営業活動、とりわけ「クロージング」です。2月～5月の新規入塾者の最も多い時期に門配や入塾説明会などがほとんどできず、大幅な塾生減・売上減に見舞われている学習塾は数知れないからです。大学や短大、専門学校の来年度の学生募集は、私立小学校や私立中学校、私立高校同様、困難を極めています。これをどう乗り切っていくかが最大の課題です。

Q : どうしたらよいでしょうか。

A : (1) 学習塾は対象人口が激減していますので、新しい業態(新業態)も付け加える以外にありません。学習塾だけをやりたいのなら、日本以外の外国、新興諸国に打って出る以外ありません。

(2) 予備校、私立学校は、外国に打って出ることと同時並行して、外国人留学生を大幅に入れる。そのために、日本語の授業と同じだけ英語の授業を行う以外ありません。

(3) 外国からの生徒・学生と同時に、外国からの先生、外国からの事務スタッフ、もっと言えば経営幹部を、日本人学生や日本人の先生、日本人の事務スタッフと同数以上、お招きするしくみづくりをする以外に生きる道はありません。

(4) 学習塾や予備校、私立学校だけが、すべて日本人生徒、先生、事務スタッフ、経営幹部の時代は終わったと言えます。その意味では、9月入学が検事総長候補の記者とのマージャン事件で中止になったのは、本当に惜しまれます。



Q : 最後に一言どうぞ。

A : 今月も先生方がお読みになれば必ずお役に立つ本をご紹介します。

(1) 1冊目は、フランスの思想家アンドレ・モロア著「フランス史(上・下)」新潮文庫 1956年10月20日の復刊版です。作家の百田尚樹氏が単独執筆した日本の通史、「日本国紀」(第9版)幻冬舎 2019年1月30日刊を読み、日本の素晴らしさを再認識しましたので、ならば、フランスの通史を単独執筆したアンドレ・モロア先生はどのようにフランスの精神を描いているのかが知りたくなり、現在、悪戦苦闘しながら読み直しています。モロア先生には同じく単独執筆の新潮文庫からの「アメリカ史(上・下)」と「英国史(上・下)」があり、こちらものごとの本質を深く考えるのに超おすすめです。

(2) 2冊目は、NHKの朝ドラ「エール」の主人公であり、作曲家の古関裕而著「鐘よ鳴り響け、古関裕而自伝」集英社文庫 2019年12月25日です。朝ドラと一緒に読んでいくと興味がつきません。



(3) 3冊目は、大阪大学大学院生命機能研究科・医学系研究科の中野徹著「なかのとのおの、生命科学者の伝記を読む」です。野口英世、北里柴三郎、森林太郎(森鷗外)はじめ、18名の生命科学者の生き様をわかりやすく解説。生命科学の専門誌「細胞科学」に24回にわたり連載したものを取りまとめました。新型コロナ感染拡大の中でどう生き抜くか、大きなヒントが得られます。

(4)4冊目は、森鷗外著「山椒大夫、高瀬舟、最後の一句、他3篇」岩波文庫、岩波書店です。皆、しみじみとしたよい作品です。「阿部一族」や難解極める歴史小説「渋江抽斎」などの足ならしとして読むのに最適です。

(5)5冊目は、「芥川龍之介全集」岩波書店1996年2月8日刊です。「本は全集で読むように」との、母校栃木県立足利高校で3年間現代国語の担当をして頂いた倉沢先生のことばを思い出し、学校休校になった3月2日(月)から1か月に1巻ずつ「龍之介全集(全23巻)」を読もうと決意して挑戦中です。「邪宗門」や「毛利先生」を収める4巻目にようやく入りました。3年間同じメンバーの足利高校のこのクラスは、倉沢先生の教えのためか、読書が極めて盛んで、医学部5名、裁判官、日本不動産鑑定士協会会長、日本ペットボトル協会会長、更には「信長の野望」や「三国志」などを世に出したコーエーの創業者の襟川陽一君(ペンネーム シブサワ・コウ)などを輩出しました。読書指導の大切さを身に沁みて感じています。

家にいる時間が長い2020年は、これぞという作家・著者の今までに読んだ本、読みかけの本も含め、「本は全集で読む」ことをおすすめいたします。

(2020年5月30日記、林明夫)